

令和元(2019)年度

全日本私立幼稚園連合会 中国地区私立幼稚園教育研修会 岡山大会

第3分科会 (島根県)

主題: 「見える力」で「見えない力」を育てる  
体づくりを通して、体と心のつながりを探る

指導助言者: 国立大学法人 島根大学大学院教育学研究科 教授  
肥後功一先生

発表者: 学校法人坪内朋和学園 育英北幼稚園  
戸島浩子 小村明子

記録者: 学校法人坪内朋和学園 育英北幼稚園  
角田めぐみ

## 1 発表の概要

### <1> 研究主題の設定理由

幼児教育が遊びを中心とした生活全体を通じて行われることは言うまでもないが、車社会で歩くことが少なくなったり、戸外で体を動かす時間そのものが減少したりといった現代の親子の暮らしの中で、遊びや生活の土台となるはずの体の育ちは大丈夫だろうかと感じていた。そこで、園での遊びや生活の質を向上させるには意識的に「体の力を高める」取組みを導入する必要があるのではないかと考え、4年前より法人3施設で、「体の力を高める」を重点目標に、法人研修を行っている。

1年目は、子ども達の現状から、「体を支える」「姿勢保持」「体幹」等に注目し、雲梯、鉄棒等の運動器具を使った活動、保育室で継続的に体を動かす環境構成を行い取り組んだ。子ども達が楽しみながら取り組むことはできたが、体の動かし方のぎこちなさが見られ、体が慣れていくまでには至らない課題が残り、今後も継続して取り組むことになった。

2年目は、1年目の取組に加えて、「瞬発力」「持続力」をねらいとして行った。鬼ごっこやまねっこ遊び等を通して、体の方向や動きを変えたり、動き続けたりする体力がついた。体の動かし方の基礎が身についたことで、自ら繰り返し楽しみ、体を動かす遊びを好むようになった。

このことから、体づくりの取組みは、単に子どもの体力向上や運動能力の改善にとどまらず、意欲や挑戦心、協同性や競争心といった幼児期の精神機能(心)の育ちに少なからず影響を及ぼすことに、私たちは注目するようになった。

たとえば、文科省「幼児期運動指針」(2012)においても、幼児期における運動の意義として「意欲的に取り組む心が育まれる」「協調性やコミュニケーション能力が育つ」「認知能力の発達にも効果がある」等が挙げられている。

そこで、今回の研究発表では、身体機能・運動能力と精神機能(心)のつながりについて探っていきたいと考えた。全身活動で体をコントロールする体験を増やし、身体機能・運動能力の向上を目指し、精神機能(心)の成長へのつながりについて考えていく。

自分の体が思うように動くことの快感(気持ちよさ)や思った通りにできないことの不思議や悔しさを体感することを通じて、意欲・探究心・挑戦心・やり遂げた喜び(達成感)や幼児期以降に重要となる自己認知・自己省察の力(自分のできること、できないことを、感情とは一定の距離をおきつつ言語化する力)・他者理解・人権感覚(他者の気持ちを共感的に理解し、他者の良い点に気づき尊重しようとする力)の育ちにどのようにつながるのか、また、友達との競争・協同の意味や方法にどのように気づいていくのか、子ども達の様子を観察する中で捉えていきたい。

## <2> 仮説と方法

子ども達の生活や遊びをより活性化するためには、身体機能・運動能力の向上が大切だと考え、当園では、特定の課題や特色教育(体操・英語・音楽等)、体づくりの活動を取り入れている。それらのことが、子ども達の精神機能(心)につながるような活動となるように意識している。

今回の研究では、子ども達の意欲をはじめ精神機能(心)につながるような活動として、サーキット活動を取り入れている。サーキット活動を楽しむ中で、越えにくい課題、越えてもまだ上に積んでいき、さらに超えていきたい課題、目に見える形での課題の積み上げができる象徴的な活動として「跳び箱」に注目した。跳び箱には、運動能力促進の側面だけではなく、自主的な目標設定(見える力)、集中力、意欲や挑戦心、友達へのまなざし(あこがれ、競争心、やさしさ、応援)、みんなで一つのことを取り組む一体感(見えない力)など、通常の遊びとは異なる、体づくりの特色教育ならではの良さを見出すことができる。この「跳び箱」を核としておくことで、サーキット活動の効果を高めていけるものとして取り入れることとしている。次の点を視点に置いて研究を進めることとした。

- ・ 子どもの発達(精神機能、遊びや生活の様子)にどのような変化をもたらすのか。
- ・ 個と集団の相互作用について(個の成長と友達関係の変化、クラスの仲間意識、協同性、友達へのやさしさ等にどのような変化をもたらすのか)
- ・ よりよい影響を及ぼすために、教師が留意すべきことは何か。

今回の発表では、年中4月から年長7月までの取組みをまとめている。3段階にサーキット活動を発展させながら、子ども達の身体機能・運動能力や精神機能(心)の育ちを捉え、より高度な、より楽しめる、意欲的になれる課題を段階的に設定するようにした。その中で「跳び箱」は常にサーキット活動の核として変えない形をとることとした。子ども達のアイデアも取り入れながら環境構成をすすめ、子ども達が繰り返し取り組む。そのことによって、子ども達の見えない力(意欲、競争心、自己認知、友達との協力、友達を応援する気持ち等)がどのように育つか探究する。

また、このような一定の課題において、子ども達の心の揺れや動き等、子ども達の内面を知ること、また子ども達自身が自分の心と向き合えるように、子どもの気持ちを大事に進めていく為にアンケート調査を行うこととした。その際には、子ども達が素直に回答できるよう十分配慮することとし、インタビュー式のアンケートを行い、自分に対する振り返り、相対化していく様子を捉え、結果を分析することとする。

### 【具体的なサーキット活動】

1. 「忍者サーキット」 (4歳児 4月～7月)
2. 「つきぐみサーキットⅠ」(5歳児 4月～5月中旬)
3. 「つきぐみサーキットⅡ」(5歳児 5月中旬～7月)

### <3> 結果と考察

具体的なサーキット活動の様子と共に、結果と考察について考えていく。

#### (1)サーキット活動①「忍者サーキット」(4歳児 4月～7月)

##### 【ねらい】

- ・自分の体の動きをコントロールする
- ・体の動きに関心を持ち、やってみようとする

##### 【活動の内容】

- ・忍者のイメージをもとにリングでのケンケン、ビームでの腕支持、跳び箱など様々な動きを取り入れ、全体を動かしていく

##### ◎身体機能・運動能力(見える力)

様々な運動器具(跳び箱4段・フープ・平均台・ビーム・風船等)を使用し、ケンケン、連続ジャンプ、腕支持等を行った。体を動かすことは好んでいるが、自分なりの楽しみ方で活動することが多く、子ども達一つ一つの動きを丁寧に見ていくと、基礎的な運動能力である体のバランスをとる動き(立つ、座る、渡る等)、体を移動する動き(走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる等)、用具を操作する動き(持つ、押す、引く等)の経験の少なさによる能力の差が大きいことがわかった。跳び箱のポイントである走る、跳ぶ、腕支持、体重移動はコツが分からない様子がみられた。

継続的に活動を進めていくと、力加減や距離感をつかむ等、自分の体を通して、感覚的に動かし方を覚えていく様子があった。

##### ◎精神機能(心)(見えない力)

最初は興味や関心をもち楽しくやろうとする気持ちはあるものの、特に目標もなく、ただ繰り返し、意欲や積極性に欠ける様子もあった。子ども達が興味関心を深め魅力的な活動になるかを考え、子ども達が好きな絵本から忍者をイメージとして取り入れることにした。少しずつ体が動き出してきたところに、忍者のイメージが加わり、自発的に取り組む姿がみられるようになった。例えば、フープジャンプがリズムよく跳べるようになったことで意欲が増し、他の活動にも気持ちが向いたり、サーキット活動をより楽しもうとする姿が出てきた。特に平均台の腕支持では、皆で連なってゆっくりしていたものが、より速く、より少ない回数で移動しようとし、友達と楽しむ姿もあった。跳び箱を跳べる子ども達が嬉しそうに何度も跳ぶ姿を見て、興味が高まる様子があった。しかし、恐怖心や苦手意識が高い子どももおり、興味はあるものの、自発的な取り組みが少なく、跳べなくても特にこだわることなく、繰り返し取り組んでいた。

## (2)サーキット活動②「つきぐみサーキットⅠ」(5歳児 4月～5月中旬)

### 【ねらい】

- ・友達と一緒にサーキット活動を進める中で、色々な跳び方を楽しみ意欲を高める

### 【活動内容】

- ・跳ぶことに注目し、様々な跳び方に取り組む。また、個人の楽しみ方に加え友達と一緒に取り組む場や体の動きを映像で視覚化する場を設け意欲や探究心につなげる

### ◎身体機能・運動能力(見える力)

様々な運動用具(ラバーリング・跳び箱5～6段)と床に貼ったビニールテープを使って全身運動(手押し車、2人組の船、ライオン歩き等)、色々なジャンプを行った。助走の距離やスピードを調整しようとする姿が見られ始める。体のバランスをとる動き、移動する動きが感覚的に分かりはじめ、何度も試す様子があった。感覚として動かしている子ども達の体の動きを、客観的に試すことができるようにするため、子ども達が自分で考えた体の動きを試すコーナーを設けた。思った通りにはいかない体の動きや、2人組ならではの体の動かし方の難しさに取り組み、実際に体をスムーズに動かしていけるように繰り返し行った。

跳び箱では、4～5段を跳ぶことができるようになり、繰り返し楽しむ姿が出てきた。しかし、毎回確実に跳べる訳ではなかったり、段が上がったりすると、頭では理解しているものの、狙ったところで踏み切ることが難しい、体重移動がうまくいかない、開脚がスムーズにいかない等体が思った通りには動かない様子があった。特に踏切では、思い切って踏み込む様子があるものの、跳び箱の段の高さの怖さから踏み切る力が弱くなり体が上がらず目線が下がる様子があった。そこで、跳び箱1段の踏み越しジャンプを取り入れ、思い切った踏切や、目線、踏切のタイミングや前方への体重移動、股関節を広げるため思い切り脚を広げるなどの感覚が養われるように進めることにした。また、客観的に自分の動きを捉えることができるように、新たに映像で捉えていくことを取り入れた。この頃から少しずつ、客観的に自分の体と友達の体の動きを捉え始める姿が見られ、距離感や力加減等、体をコントロールする力が育ち始めた。

### ◎精神機能(心)(見えない力)

「つき組サーキットⅠ」に取り組む中では、体の動きが少しずつスムーズになったことで、「跳び箱」を挑戦することだけに満足することなく、なぜ跳べないのかと探究する心ややってみよう挑戦する心も育まれてきた。子どもたちの中で、跳べた時の達成感も大きく、粘り強く取り組む姿も見られるようになった。2人組で行う活動を取り入れたことで、自分でやりたいようにするだけでなく、タイミングを合わせたり、どうすればうまくできるのかと共に考えたり、一緒に活動する喜びを共有する姿が多く見られるようになった。また、映像で自分の体の動きを客観的に見たことで、自分の動きを観察するようになり、友達の動きをよく見たり、比べたりと、友達の動きにも関心をもてるようになり、友達との関わりも広がりを見せるようになった。

この頃から、サーキット活動の中で声をかけ合う場面や、跳び箱の際応援する、跳べた友達に拍手する等の姿が見られるようになった。しかし、跳び箱は応援していて、跳べても跳べなくても反応はそれほど変わらず、応援することされることへの嬉しさはあるものの、子ども同士の心に響く様子は見られなかった。

### (3)サーキット活動③「つきぐみサーキットII」(5歳児 5月中旬～7月)

#### 【ねらい】

- ・意欲的にサーキット活動を行い、自分の思うように体をコントロールし、目標に向かって挑戦していく

#### 【活動内容】

- ・跳ぶことに注目し、リングの的を小さくしたり、遠近両方の跳び方を取り入れ、体の動きを調整していく  
また、引き続き体の動きを映像で視覚化する場を設け、自己認知へつなげていく

#### ◎身体機能・運動能力(見える力)

様々な運動用具(ラバーリング・跳び箱5～7段等)を使って、小さなリングへのジャンプやペットボトルを置き様々なジャンプを試すことができるようにした。これまでよりもさらに細かい体の動きをコントロールすることができるようになったことで、スムーズに体が動くようになり、力強さや勢いも感じられるようになってきた。ジャンプ一つをとっても、高さ、距離、縦への跳び、横への跳び、リズムよく跳ぶ等様々な跳び方を、戸惑うことなくできるようになった。サーキット活動を通して、踏切の勢い、開脚、屈伸のやわらかさや、膝のバネ等日常にはない体の動きの経験を積み重ね体の動きを調整したり、切り替えたり、違う動きを同時に行う等動きが以前より多様化し、身のこなしも洗練化されてきている。跳び箱は、クラスのほぼ全員が5段を跳びこえることができるようになった。

#### ◎精神機能(心)(見えない力)

「つき組サーキットII」に取り組む中では、体がコントロールできるようになり、スムーズに動かすことができ、様々な体の動かし方が身についたことで、自分のことだけでなく、次第に友達に声をかけたり、応援したり、友達に教える姿も見られるようになった。さらには、一緒に喜ぶ姿も増えた。また、自分のできていることを客観的に捉えることができ始め、悔しさやもどかしさ等様々な感情を味わう経験が増えるようになった。映像を見て、自分の思っている体の動きとの違いにショックを受けたり、姿を受け止めたり、繰り返し挑戦する姿もあった。

自分の体の動きを客観的に捉え始めた頃から跳び箱の段数も上がりはじめ、試行錯誤しながら、多様な動かし方ができるようになると、跳び箱の段数の自己目標を持ち、そこに向かっていく力が育ち始めていることが分かった。そして、子ども自身が楽しさ、心地よさから意欲や探究心、挑戦する気持ち等、目標に向かっていく心の成長をしていくと、粘り強さや悔しさ、もどかしさ等を感じ始め、自己認知、自己省察の力の芽生えへとつながりはじめる。自己を知ることにより、他者を注意深く観察できるようになり、さらには、友達と一緒に喜んだり、応援したり、教え合ったりといった精神機能(心)(他者理解・人権感覚)の成長へとつながっていると分かった。

#### (4) 跳び箱アンケート

インタビュー式アンケートでは、子ども達が答えやすいような質問項目を作成することとした。

回答の仕方も ◎だいすき ○すこしすき △あまりすぎじゃない ▲すぎじゃない

の4段階とし、記号もつけてイメージしやすいようにした。クラス全体で、今までの取組みについて振り返った後、子ども達が今の自分と取組み初めの頃の自分についてインタビューをとった。4人ずつ距離を空けて机に座り、素直に回答しやすいよう、サーキット活動には、関わっていない教師が付き、子ども達が自由に回答できるよう配慮した。アンケート結果について、参考資料①に示す。その後、回答した理由について必要に応じて質問し確認をした。以下のような点があった。

- ・ 一人一人、各設問について回答を変えており、素直に回答できている
- ・ 体を動かすことを好んでいる
- ・ 子ども自身が体の成長を感じている
- ・ 競争する、雲梯など個人的な目標よりもルー、マーチングといった友達と一緒にやることの方が好む傾向がある
- ・ 跳び箱への苦手意識がある子どもは他の項目と比べて消極的な回答となる
- ・ 跳び箱については、挑戦したい気持ちから低い段を好きでないと答えることがある
- ・ 体がスムーズに動いている場合、自分なりの目標(着地をしっかりしたい、一度も止まらずリングジャンプをしたい等)が達成できないくやしきやもどかしきから、実際はできているにも関わらず、だいすきと言いきれない場合がある
- ・ 高い段への気持ちの高さから自分の力と気持ちが合わず消極的になっている場合がある
- ・ 友達との関わりが増え、応援をする、応援をされることへの関心が高まっている

私たちの予想以上に子ども達は自分の考えで回答ができ、理由もきちんと答えることができた。それぞれに跳び箱が跳べるようになってくると、跳び箱が跳べればよいという考えはあまり感じられなくなり、自分の体の動きを捉えたり、一人一人目標を持ち取り組むことができるようになってきている。そのことで、うまくいかない葛藤を感じていることも分かった。また、友達の存在があることで、客観的に見ることや応援すること等の精神機能(心)(見えない力)の育ちも確認することができた。

#### **<4> 総合的考察と今後の課題**

##### (1) 教師の援助について

自由な遊びを生活の中心とする幼児教育の中で、跳び箱を核としたサーキット活動という一定の取組みを通して、子ども達一人一人の身体機能・運動能力の成長を通し、精神機能(心)の成長へとつなげていくことを共通認識し、個々に応じた配慮、支援、内面の支えを大切に教育活動を進めてきた。その中で、跳び箱に取り組む際に教師は、子ども達が一定のスキルを体が習得するまで、技術についての指導を行う。助走、踏切り、手の付き方、開脚、着地に至るまで、必要なスキルを指導するこ

とで安全に取り組むことにもつながっている。教師は、一連の動きに必要なスキルを理解し、その時の子どもの姿に合った指導を行うと共に、子ども自身が客観的に自分を捉え、自己認知へつながるよう環境構成していくことが大切である。

また、技術面だけでなく、子ども自身が体の動きを自己認知し、葛藤したり悩んだりする子どもの揺れ動く心を支え、一人一人の性格やその日の出来事等にも配慮しながら、見守ったり励ましたりしていく必要性を感じ、サーキット活動に関わらず、多方面(遊びの場面や日常生活、行事等)からきっかけを作り、子ども自身が自分と向き合い、自分を知らうとすることへつながるよう、教師と一緒に向き合っていく必要がある。しかしそれには個人差やそれぞれのペースがあること、また教師が導いていけばかりでは、子ども自身の気付きにはならないことに配慮しなくてはならない。サーキット活動の充実と共に、日常の遊びやお泊り保育といった行事など多様な経験の中で、友達との協力やグループ活動、子ども達一人一人の意欲が相互作用し育ってきていると感じた。

今回の研究では、サーキット活動に取り組んでいく中で、同じ体を動かす活動をする体験から、友達とのつながりにおいても変化がみられた。友達の取り組んでいる姿を見て、アドバイスをしたり応援したりする姿が増え、友達が跳べるようになったことを友達同士で喜ぶ姿がみられるようになった。自分の目標に向かって取り組む中で、友達と一緒にやってみようしたり、諦めずに取り組もうとしたりする力へつながっていく。教師は個と集団をつなぎながら、援助していくことが大切である。

## (2)園生活について

普段から男女問わず、仲良くごっこ遊びを楽しむ姿があり、友達と一緒にいることを好むクラスである。身体機能・運動能力が高まり、体が安定し、スムーズに動けるようになった。体を十分に動かそうとする中で、意欲や挑戦心などが生まれ、子ども達の園生活は、受け身から自分たちで生活を進めようとする姿が多く見られるようになった。

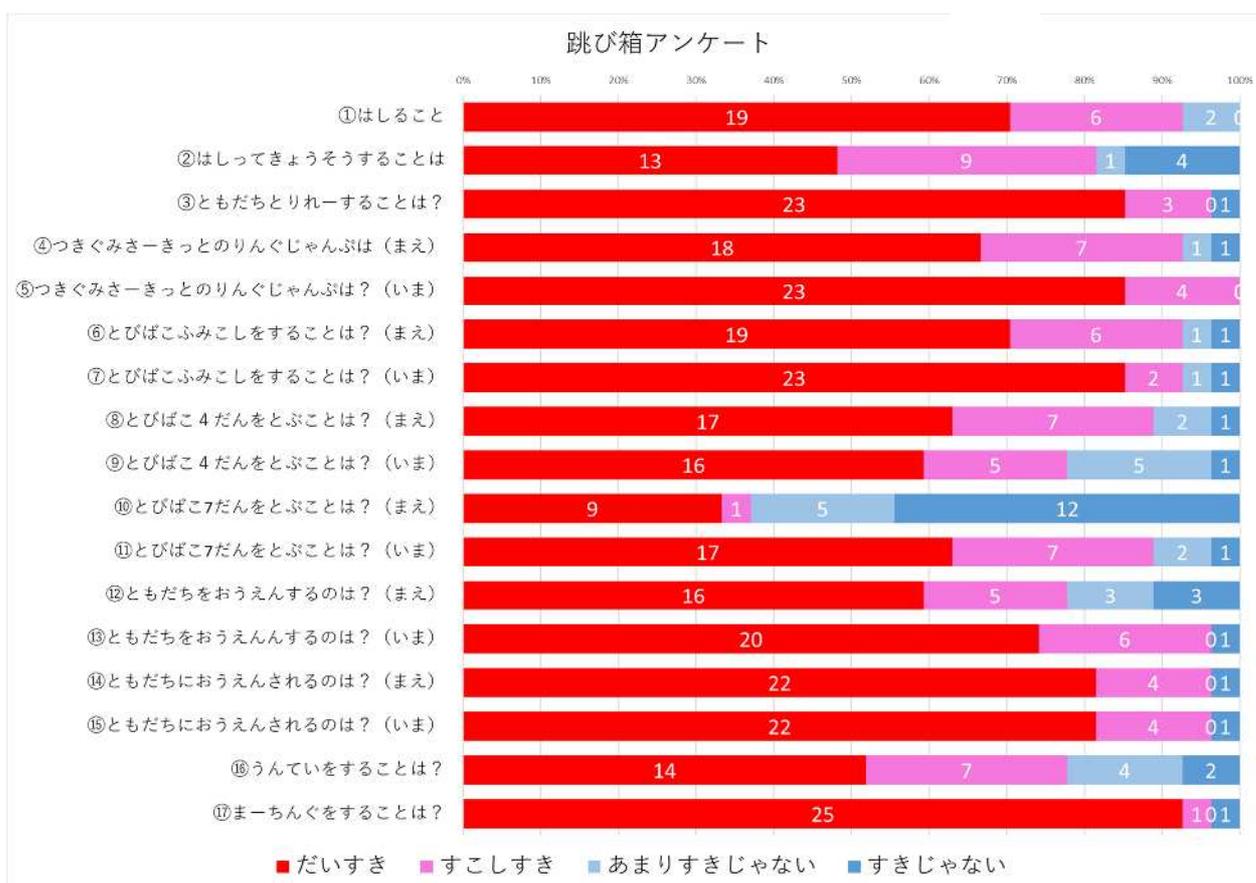
- ・ 年少児の着替えの手伝いで、ボタンだけ手伝う、ブラウスのたたみ方を教えるなど、相手に合わせて関わる様子があった。
- ・ 話し合いの場面で、自分の主張を述べるだけでなく、相手の話に耳を傾け、話し合いができるようになった。
- ・ スピードや距離感を調整することができるようになり友達とぶつかったりすることが減った。
- ・ 行事では、自分だけが楽しく参加をする姿から、友達も一緒に楽しめる方法を考え始めるようになった。
- ・ 放送当番では、子ども達同士で自発的に話す内容を決め、堂々と放送することができるようになった。
- ・ 障害物ドンジャンケンでは、様々なジャンプをし、自分なりの工夫をし、より速く、より高度に楽しむ姿があった。
- ・ 生活や遊びの中でより楽しめるように考え、工夫し、進めようとする姿が出てきた。

様々なサーキット活動を行ってきたことで、体を動かすことの心地よさや多様な動きに対応できる体が育まれ、子ども達が自分の思うように体をコントロールし、動きが洗練化されてきていると感じている。体が安定し、「疲れた」という言葉もほとんど聞かれなくなった。体を動かす際の空間の取り方も自然とできるようになり、自分の体、体の動きについて子ども達が体感しながら動かせるようになってきている。

### (3)今後の課題 ～個と集団の相互作用について～

今後は、子ども達自身が、自分のできること、できないことを客観的にとらえ、それに向き合い、できようとする気持ち、子ども一人一人の個の力を育みながら、自己認知、自己省察の機会を意図的に設け、子ども達の成長を支える環境を整えていく。そのことが、一人一人の身体機能・運動能力から精神機能(心)の成長を促し、個の成長へつながっていく。個の成長が見られる子どもたちの集まりである集団が、集団の機能を高め、互いに認め合い、学び合うことにより、さらに個の成長へと相互作用していく、といった高め合える個と集団づくりを目指していきたい。今後も意図的な課題設定を導入しながら、そこでの体験や育ちが自由な遊びをより豊かにしていくことを目指し、園での遊びや生活の質を向上させていきたい。

#### 参考資料① 跳び箱アンケート



## グループ協議 ワークシート

- 個人ワーク 下記資料に自分の考えを記入してください。
- グループ協議 (1)(2)について、意見を出し合しましょう。その後、グループでまとめてください。  
会場の3グループ程度発表して頂き、会場全体でも情報を共有したいと思います。

### 【協議内容】

園生活で、運動能力や体力の向上を目指した意図的な活動をどのように取り入れていますか。また、効果がでるように工夫している点(実施方法・頻度など)や、効果を把握する方法などについて教えてください。

(1)園生活で、運動能力や体力の向上を目指した意図的な活動をどのように取り入れていますか。

- ・日常からコツコツと取り入れる。また、一年一年の積み重ねを大切にしている。
- ・体づくりで、毎月目標を掲げる。毎週その目標におかたて遊びを通して取り組んでいる。
- ・学年によって足りない力、補いたい力を中心に取り入れている。
- ・日常生活の中で(ぞうきんがけ、黙想など)取り入れている。そこから、子ども達が自ら考えて動く姿勢が出てきた。
- ・様々な遊びをしても、一つだけは皆で一緒に取り組む活動に誘っている。そこから自分達でやろうとする姿が出てきた。
- ・サーキットを取り入れ、それぞれのレベルにあった物を自分で選んで遊んでいる。
- ・体操教室等プロの講師から教えてもらい、職員も学ぶようにしている。
- ・リミックを取り入れ体幹を鍛えている。
- ・見えない力をどのように捉え、取り入れていくのが永遠の課題。取り入れることで、苦手意識が出て自己肯定感が下がる子どももいるのではないかな。

(2)効果がでるように工夫している点(実施方法・頻度など)や効果を把握する方法を教えてください。

- ・カードを作成したりシールを貼ったりして、視覚的に「できた!」が分かるようにし励みや意欲につなげる。
- ・できるようになった子どもは、手本となってもらい自信や意欲向上につなげる。
- ・できる子どもの姿を見ることで、憧れや意欲を持てるようにしたり、目標を見つけたりすることにもつなげる。
- ・友達同士で教え合ったり、友達の頑張りに刺激を受け合ったりすることを大切にする。
- ・子どもができることから保育の中に取り入れていくことで、積極性にもつながる。
- ・全学年で取り組む。
- ・一日一回は必ず経験ができるようにし、まずは全員で遊ぶ。
- ・毎日同じコースの繰り返しにならないように変化をつける。・子どもの姿を見ながら、意欲を引き出す環境作りをする。
- ・年齢が低いほど、初めての事への取り組み方やきっかけ作りを大切にする。
- ・他の子どもと比べるのではなく“個”を大切にするので、自分ができるようになることの喜びにつなげる。
- ・物に親しみを持てるように皆で用具を運んだり準備をしたりする。集団に入りづらかった子どもが一緒に取り組めるようになった。
- ・いきなり玉入れ等の勝負をするのではなく、前段階として玉で遊ぶ等し、苦手意識を持たず遊びとして楽しめるようにする。
- ・不安や恐怖を取り除き、その子どもなりの参加の仕方を見守る。また、無理強いせずにタイミングを図る。
- ・子どもが“してみたい”“できるようになりたい”と心を動かすような保育者の援助が必要。
- ・保育者の根気強い関わりで子ども達が前向きに参加する。
- ・保育者も知識を身につけていくことが大切。
- ・保育者がわくわくした気持ちで取り組むと子ども達にも伝わる。

### 3 指導助言

「幼児教育と“ねばならないこと”」

国立大学法人 島根大学大学院教育学研究科 教授 肥後功一先生

#### 1. 子ども達の生きていく時代と幼児教育

新しい学びが必要とされる時代とは？

①SDG's ②Society5.0 ③人生 100 年時代

・第 2 第 3 の人生を学び続けていく力が必要。

こうした状況を踏まえ、幼児期から 3 つの資質・能力を柱とした新学習指導要領、そして新たな学び方「主体的・対話的で深い学び」が始まる。

・教師が教える側面よりも、生徒が自らの意思で主体的に学び周囲の環境や人とまた自分自身との対話の中で学んでいく。

これからもしっかりした教育計画や環境構成による「自由な遊び」がその中心であるべきだが、一方、幼児教育の時代にすでに多く行われている「ねばならないこと」に関する取り組みについて、どのような議論がされているだろうか？

・私達が現在行っている自由あそびは自由を前提としながらも、例えば“秋祭りごっこ”などある枠組の中で条件を設定して遊ばせている事が多い。自由あそびの劣化に気付かずに繰り返しても子ども達の力はつかない。何もないところから作っていく本当の意味での自由遊びと、今回の発表のように一定の課題を設定し皆で向かっていく活動の意味を今一度考え、遊びの質を上げていくことが必要。幼児期には土台を作っておかなければならない「教育の大切な試み」があるのではないか。

#### 2. “ねばならないこと”の危機—幼児教育と枠・型・役—

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」のデータから

1. 暴力行為

・小・中・高等学校における平成 29 年度の発生件数は？…63,325 件

・生徒間暴力が一番多い。

・小学校での件数が増加している。

不登校

・不登校児童生徒 14 万人のうちおよそ、小学生 4 万人弱、中学生 11 万人としてきたが、NHK の 5 月の番組では中学生 44 万人…かくれ不登校が 33 万人

学校教育において“ねばならないこと”はどのくらい必要だと思いますか？

・学校に「行かねばならない」の考え方の人は行くことを目的ととらえている。

・学校に「べつに行かなくても」の考え方の人は手段だととらえている。

・幼児教育は、主体性や一人一人を大切にされてきた一方で生活やしつけについては？

「自由・個性・主体性」と「ねばならないこと」との関係

↓

実は大事！こちらの幼児教育の研究は手薄である。

・私達が子どもにつけてあげたい力は、「一人で遊べる力」である。まずは、一人で工夫して遊べる力がある子どもが、集団の中で互いの意見を言ったり協力したりしてあそぶことが大事である。「一人で遊べる力」は小学校に入ってから学びの力につながる。

□生活習慣とは

「生活習慣とは外から与えられる型を使って自分らしきを作ることの練習」

□子どもが「自ら主体的に」行動することに先だってまずは「決められたもの」があり、一方的に与えられ、子どもはそれを引き継ぐしかない…そういう経験の意味は？

・今、自立できない子ども達は自分らしくなる枠組を作りそこねている。

□「型・枠・役の気持ちよさ、快感」を伝えることが大切

・子どもはその快感を知っていて、ごっこ遊びや真似をするのも型の模倣である。

・型枠や模倣＝“らしき”の追求である。

・「型・枠・役」は子どもを縛ることもあるが、それを持って自立しないと“らしき”を作り出すこともできない。→だから、生活習慣は大事である。

3. 内面を育てる—幼児期教育の中で芽生える大切な力—

□アイデンティティ(自己同一性)～自分らしきのこと

何かを重ねていき自分と同じと思おうとするが、それとは完全に同じではない、やはり違うと思うようになり、また重なってみようとする。

↓

その「ズレ」から、“自分らしき”を発見する。

・昔は、人と暮らす中から重なること、つまり「合うこと(協同)」の意味が伝わってきた。

今は、大人が持っている生活状のスキルが受け継がれない。

・個々の子どもの成長に応じたちょうどよい型や枠を！

↓

子どもを適度にしばれない社会は、子どもの育ちの可能性を守れない。

子どもを縛りすぎる社会も子どもの育ちの可能性を脅かす。

□母性のカ・父性のカ

・跳び箱…父性的な鍛え方

その前提には母性が必要。

保育者のフォロー、支え、型や枠組みがあることが大事。

その上に自信や達成感といった父性が成り立つ。

□ 跳び箱アンケート調査について

- ・楽しいことばかりではない…不得意、苦手、苦しいと言える事、言えるチャンスを与えることが大事。
- ・自分の中をみて自分の言葉で伝えられる(リフレクション)力をつける。

→ 保育者が受け止める

□ いじめの問題から考えてみる

- ・小・中・高等学校、特別支援学校のいじめ認知件数…414,378 件  
小学校で急激に増加している。特に低学年が多い。
- ・幼児期にしておくべきことが何かあるのではないか？  
好きな友達と好きな遊びをするのは当たり前。  
どのお友達とも同じように等距離で遊ぶことをめざす。

□ 自分の中の「カオナシ」に気付き、これを言語化して対峙できるようになること

- ・メタ認知(リフレクション)→自己制御(セルフコントロール)  
自分の中の影が言えるようになること。
- ・誰か(例えば保育者)の言葉かけが自分の中に入って来て、言語化できることが  
セルフコントロールにつながる。

まとめ

- ・自由遊びと、型や枠を与えて遊ぶ保育の関係性を考えていく。
- ・私立幼稚園ならではのきりと光る特色教育という型や枠から自由遊びに反映させていく。型枠のある遊びの中で成長した子ども達が、主体性のある遊びをした時に、“なにか違う！！”となることを願う。
- ・自分の内面を言語化する力を鍛え、悩みや葛藤を口にすることができる事が小学校へ上がった時に大事になってくる。